

# 韓国服の構成技法について (6)

## The Constructional Technics of the Korean Clothes (part 6)

越 野 隆 子  
Takako KOSHINO

### はじめに

本校研究集録前回に引き続き、女子が儀式または婚礼の際に着用した翟衣（チョクイ）<sup>チキイ</sup> 円衫（ウオンサム）<sup>エンサン</sup> 華衣（ファルオツ）<sup>カイ</sup> 唐衣（タンウイ）<sup>トウイ</sup> または（タンイ）等の礼服があるが、今回は円衫（ウオンサム）について歴史を考察し次いで文献に基づき、構成技法を考察しながら試作品（実物の $\frac{1}{2}$ ）の製作を試みたので報告する。

### 1 歴史的考察

朝鮮朝時代は518年の長期であるので、前・中・後期に分ける。前・中期には露衣（ノイ）これは大衣に属するもの、長衫（チアンサム）これは大袖に属するものがある。これ等の中に円衫（ウオンサム）が含まれていたが、後期になり円衫（ウオンサム）がひとつに集約されたのである。

円衫（ウオンサム）は統一新羅時代に唐より取り入れられて、高麗時代にも着用され、更に朝鮮朝時代に於いても女子の礼服として着用された表衣の一種である。

朝鮮朝時代に入って、衣服に対する変遷の過程を見ても余り変化は見られないが、宮中生活と一般庶民生活の規範・様式に於いては異なる点がある。

女子の衣服については宮中女服と一般女服に大別することができる。宮中服については儀式に用いられる礼服が問題になる。何故ならば宮中には妃、嬪を始め多くの宮女がおり、宮女の中には品階を持っている内命婦、品階を持たない一般宮女がいた。それ等の宮女は自らの地位に定められた服装を着用していたからである。

円衫（ウオンサム）<sup>エンサン</sup>には黄円衫（ファンウオンサム）紅円衫（ホンウオンサム）緑円衫（ロツクウオンサム）の三種類ある。

円衫（ウオンサム）<sup>エンサン</sup>の形態は襦（チヨゴリ）周衣（ツルマキ）唐衣（タンウイ）<sup>トウイ</sup>とは異なる点がある。身頃の前中心線は突き合せになり、脇はスリットしている。前の身丈は後の身丈より短かく、身頃の裏の脇のスリットより裾にかけ、廻りに襖（ふちとり）をつける。その襖（ふちとり）の裾の角を額縁にする。衿の形も異っている。袖は広袖で色とりどりに接ぎあわし、即ち色襖（セクトン）にし袖の丸味が図のように袖付の袖下（ふり

## 韓国服の構成技法について⑥

側)の裾が丸くなっている。色襷(セクトン)の先に汗衫(コトルチ)をつける。

黄円衫(ファンウオンサム)は皇后が着用されるものである。絹織物で黄色の地紋のある表地、紅色の裏地が使用してある。袖は広袖で袖口には金織緞白色汗衫(コトルチ)をつける。袖幅の袖口より紅色、藍色の色襷(セクトン)になっている。

皇后の印として五爪龍補(オチヨリヨンボ)を胸、背、両肩の四箇所につける。

図(1)のように斜線の所は金織がしてある。衿の形が襦(チヨゴリ)唐衣(タンウイ)とは異っていて衿は先端から5cm上った所より狭くし、内側の掛衿があらはれている。衿先の所にボタン(タンチウ)をつける。赤色の大帯をしめる。

紅円衫(ホンウオンサム)は朝鮮朝時代の王妃、世子妃が着用した大礼服である。

形態としては黄円衫(ファンウオンサム)と変化はないが、表地は絹織物で紅色の緞又は紗、裏地は薄い黄色で藍色の襷(ふちとり)がつけてある。両肩から袖口まで雲鳳紋(ウンホンムン)が織金されている。広袖の袖口より黄色、藍色の色襷(セクトン)その先に白色の汗衫(コトルチ)をつける。胸、背、両肩に四爪龍補(サチヨリヨンボ)をつける。衿先にボタン(タンチウ)をつけ、藍色の大帯をしめる。

緑円衫(ロククウオンサム)は朝鮮朝時代に王妃、世子嬪、公主、翁主、宮女又は士大夫の婦女子達の礼服である。しかし王妃、世子嬪が着用する時は草緑色の雲紋緞の絹織物に鳳凰を刺繍した胸背をつける。

形態は変わらないが草緑色の絹織物で緞又は紗で仕立てるが、広袖の袖口より紅色、黄色の色襷(セクトン)にしその先に汗衫(コトルチ)をつける。これは白色の一重である。

黄円衫(ファンウオンサム)紅円衫(ホンウオンサム)のように金織はなく、花紋を華麗に金箔してある。衿先にボタン(タンチウ)をつけ、紅色の帯をしめ、前中心線の丁度胴囲線位に白色の紐をつける。後に広幅の黒色のリボンをつける。

朝鮮朝時代の後期には規律もゆるやかになり庶民の婚礼服としても金箔のないものが使用されるようになった。

身分に従って衣服の色と紋様を異ったものにし、前述のものと形態は変わらないが、広袖の色襷(セクトン)が黄色、藍色、赤色、緑色となる。その先に汗衫(コトルチ)をつけ、紅色の帯をしめ、後に広幅の赤色のリボンをつける。

衿には広袖につけた色襷(セクトン)に使用した赤色を使い、衿先のボタン(タンチウ)の代わりに衿と同じ赤色のリボンをつける。

なおボタン(タンチウ)については、国末開化期に入りボタン(タンチウ)の簡便な点および美観上から使用されだした。これには金銀、玉石で作られたものもあり、模様も蝶、蝙蝠、菊花等いろいろなで、中には四角いところに各種の紋様が施してあるものもある。

## 2 構成技法

### 1) 円衫(ウオンサム)

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

(1) 表地

草緑色 身頃 袖 衿 90cm 幅 6.2m

黄色 袖 90cm 幅 1.8m

鮮紅色 袖 腰紐 細い飾紐 90cm 幅 4 m

白色 汗衫（コトルチ） 衿 前紐 90cm 幅 1.8m

藍色 襪（ふちとり） 90cm 幅 2.2m

又表地と同色を使用することもある。

裏地

鮮紅色 身頃 袖 90cm 幅 6.2m

薄生地を使用するが、時には表地と同じ生地を使用することもある。

(3) リボン

表地 黒色 90cm 幅 1.3m

裏地 鮮紅色 90cm 幅 1.3m

2) 金織 金箔, の位置

3) 製図 実寸  $\frac{1}{20}$  単位 cm

4) 裁断 縫い代の取り方

3 試作品（実物の $\frac{1}{2}$ ）

1) 使用した生地及び用尺

(1) 表地

緑色 縞子紋織 合成繊維 90cm 幅 3.1m

身頃 衿 袖 裏身頃につける襪（ふちとり）

赤色 袖 腰紐 90cm 幅 2 m

黄色 袖 90cm 幅 1 m

白色 汗衫（コトルチ） 衿 前紐 90cm 幅 1 m

(2) 裏地

紅色 キュプラ 120cm 幅 1.5m

(3) 芯地

袖口に使用した障子紙少々

2) 縫製

(1) 袖づくり

① 汗衫（コトルチ）の袖下袋縫いにし縫い代は後に折る。

② 袖口に紙芯（2 cm幅）を入れ、1 cm 折り、2 cm 折って三ツ折りにしくける。

③ 緑色の袖布と赤色の色襪（セクトン）中表に合せて縫い縫い代割る。次に赤色の色襪（セクトン）と黄色の色襪（セクトン）を中表に合せて縫い縫い代を割る。

## 韓国服の構成技法について(6)

④ 袖下線の汗衫（コトルチ）付の方の表袖，裏袖それぞれ約5cm別々に縫い縫い代後に折る。

⑤ 表袖（黄色）と汗衫（コトルチ）中表に合せ縫い縫い代を黄色の方に折る。

## (2) 身頃

## ① 表身頃

背縫を縫い縫い代を割る。

② 襷（ふちとり）の裾の角を額縁に縫って縫い代を割る。

## ③ 裏身頃

背縫を縫い縫い代を右身頃が高くなるように折る。

④ 裏身頃に襷（ふちとり）をつける。左右の脇，裾。

前身頃に襷（ふちとり）をつける。左右の前中心線，左右の脇，裾。

## ⑤ 後身頃

表身頃と裏身頃を中表に合せ，左のふりの丸み手前より上部の角型より脇のスリットを縫い，裾より右の脇スリットの上部の角型よりふりの丸み手前まで縫う。縫い代0.7cm～1cmに切り揃える。上部の角型の所はY字型に切り，裾の角部及びカーブ線に2～3カ所切りこみを入れる。表に返し形を整える。

⑥ 前身頃も上記と同じ要領で縫い，前中心線の衿付止りまで縫う。

⑦ 表身頃の肩線を縫い縫い代は後へ折る。

裏身頃の肩線を縫い縫い代は後へ折る。

⑧ 表身頃の袖付線を縫い縫い代は割る。

裏身頃の袖付線を縫い縫い代は袖の方へ折る。

⑨ 袖下線を縫う。

袖口線より手を入れ，表袖，裏袖別々に中表に折り，表地の後袖の裏を手前にし，表地の前袖の裏と裏地の前袖の裏と合せて袖下線を四つ縫いにする。（丸みの所まで）丸みの所の縫い代は細く切り，山型に切りこみを入れる。表に返し形を整える。

⑩ 汗衫（コトルチ）の縫い代に袖裏の袖口線を折りくける。

⑪ 衿づくり

緑色の衿と白色の衿を縫う。縫い代のカーブ線を山型に切り縫い代を白色の衿の方に折る。

⑫ 緑色の衿付線を表身頃の衿付線につける。

⑬ 裏衿は衿付線に図の点線の所を折り輪にしてくける。丸みの所は形を整える。

⑭ 表衿（白色）幅を整え裏衿にくける。

## (3) 紐づくり

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

腰紐，前紐（白色）後リボン（広幅）前細紐（赤色）（袖の角型の所につける紐）

- (4) 前紐（白色）前細紐（赤色）指定の位置につける。
- (5) 左右両脇のスリットの上より12cm～13cmの所に赤糸でとめをする。
- (6) 仕上げのアイロンをかける。

おわりに

上記に述べた構成技法により，平面構成の諸条件に適応しているため，円衫（ウオンサム）は平面構成である。

円衫（ウオンサム）はその歴史を見ても統一新羅時代より現在に至るまでの礼服として使用され，形態は表面的には変化は見られないが，参考資料を見た所では図(1)と写真黄円衫（ファンウオンサム）を図(4)とでは一部に変化が見られる。それは身頃の前後脇線の下部の所が，前者（図1）はカーブしているが，後者（図4）は直線になっている。

皇后大礼服，黄円衫（ファンサム） 袖丈71cm

王妃・世子妃大礼服，紅円衫（ホンウオンサム） 袖丈71cm

公主・翁主・宮女または士大夫の婦女子たちの礼服，緑円衫（ロックウオンサム） 袖丈70cm

庶民の新婦婚礼服，緑円衫（ロックウオンサム） 袖丈60cm

しかし私が参考にした製図は，袖丈80cmであった。

宮中で使用される各種円衫（ウオンサム）はボタン（タンチウ）を使用。

庶民の緑円衫（ロックウオンサム）は衿の色を袖に使用した色襖（アクトン）の中の一色である赤色を使用し，掛衿は襦と同じである。

衿先にはボタン（タンチウ）でなく，蝶結びのリボンをつける。衿と同色である。

上記の袖丈，ボタン（タンチウ）を見ても階級制度のきびしいことを知ることができた。

円衫（ウオンサム）の裏身頃の脇線，前中心線，裾に襷（ふちとり）をつけて布が痛んだ時に取りかえられるように工夫されている。この事からもいかに物資を大切に取扱っている国民であるかがよくあらわれていると思った。

私達は現在豊かな資源に恵まれているが，この合理的な精神を大いに見習うべきであろう。

終りにソウル誠信女子大学 朴 京子教授が贈呈下さいました「韓国衣裳構成」の書籍を参考にさせて頂きましたこと深く感謝し，厚く御礼申し上げます。

#### 引用文献

- (1) 韓国衣裳構成 1977 2月 発行 著者 朴 京子，林 純暎 発行所 修学社 参考 p. 253 p.254, 255 (製図)

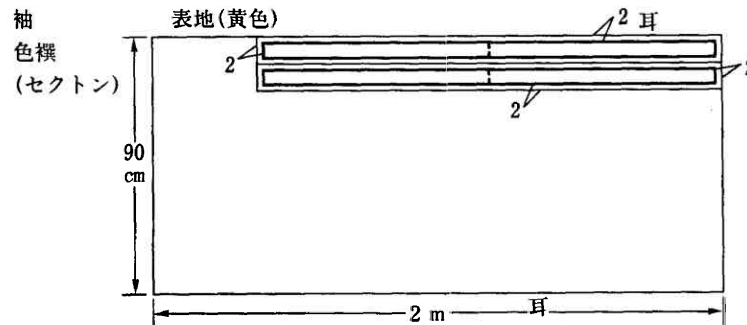
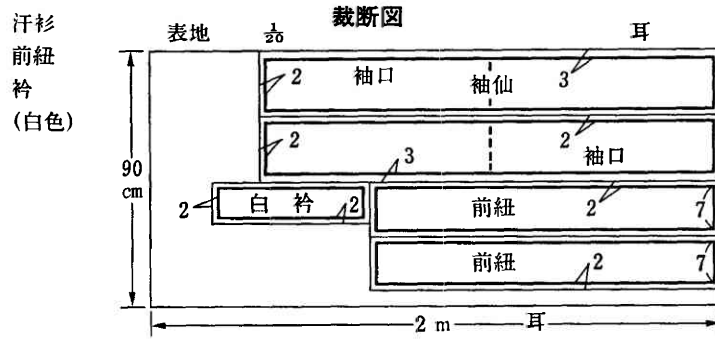
韓国服の構成技法について(6)

- (2) 韓国服飾文化史 昭和58年 1月 発行 著者 朴 京子, 柳 喜卿 発行所 源流社 K.K.
- (3) 学術誌 衣生活 1985.5 No. 2 発行所 衣生活研究会  
李朝末期の宮廷礼服と一般女子服の歴史的考察(1) 一文化学園博物館所蔵資料を中心に一 著者  
金 英淑
- (4) 朝鮮王朝韓国服飾図録 1984 発行  
著者 金 英淑, 孫 敬子 発行所 臨川書店刊 参考 p.7, 黄円衫 p.11, 紅円衫 p.15, 緑  
円衫・庶民円衫 p.109
- (5) '83 裏地と芯地 昭和57年 9月 発行所 関西衣生活研究会  
韓国の民族服(晴衣と被衣) 著者 松本敏子, 橋本康子 参考 p.43

翻訳に使用した辞書

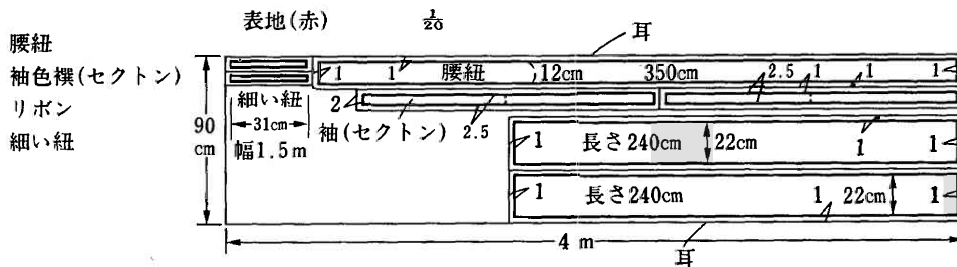
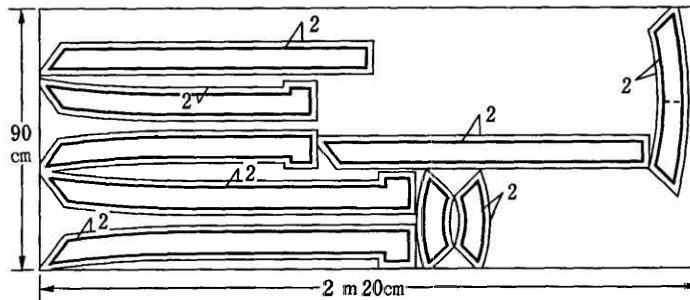
1. 日韓辞典 1978 2月 発行 編著 朴 成韓 発行所 徽文出版社(韓国)
2. 韓日辞典 1978 2月 発行 編著 金 素雲 発行所 徽文出版社(韓国)

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号(1987年)

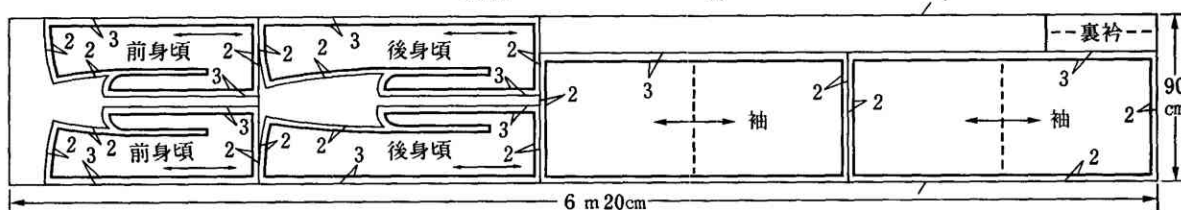


襦(ふちとり)裁断図

(縫い代 2 cm)



裏地 裁断図



韓国服の構成技法について(6)

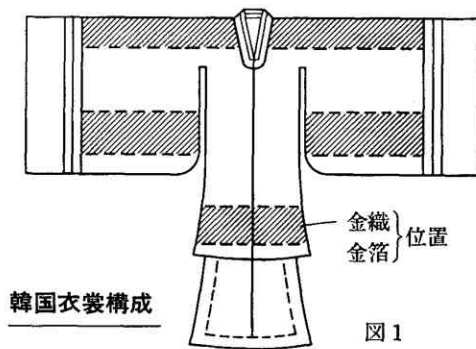
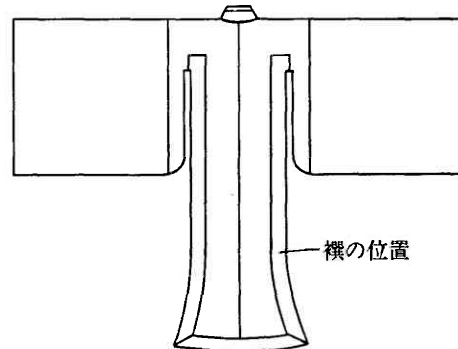
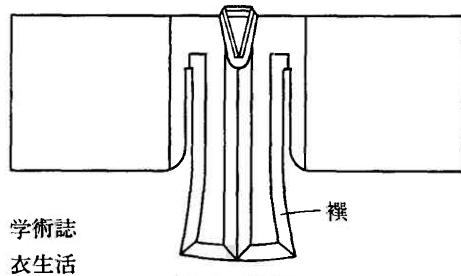


図1



円彩 後裏 図2



円彩 前裏 図3

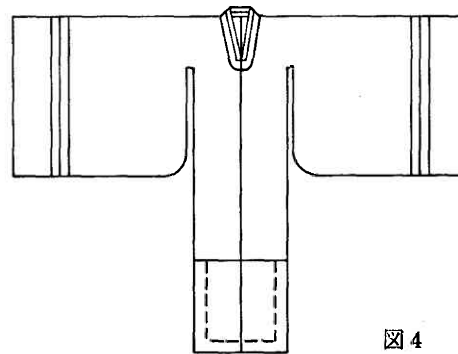
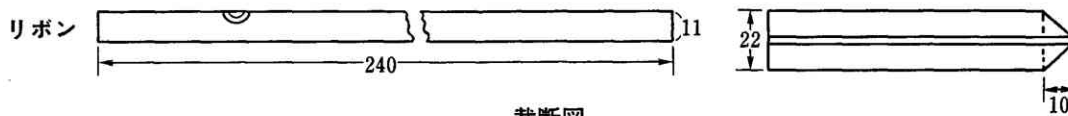
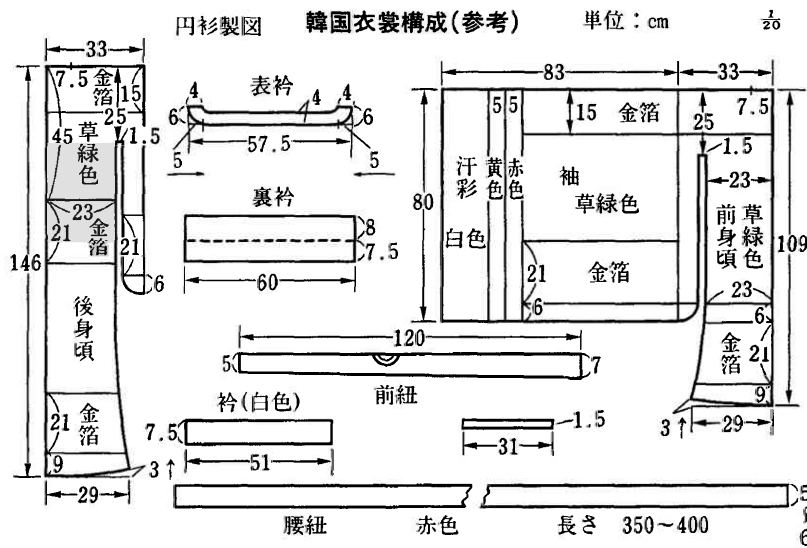
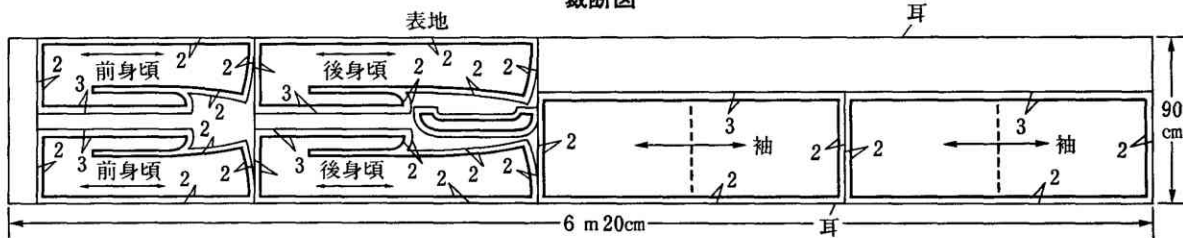


図4



裁断図





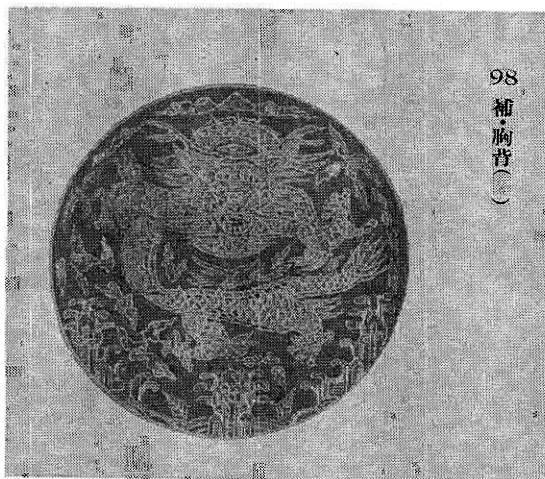
大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号(1987年)



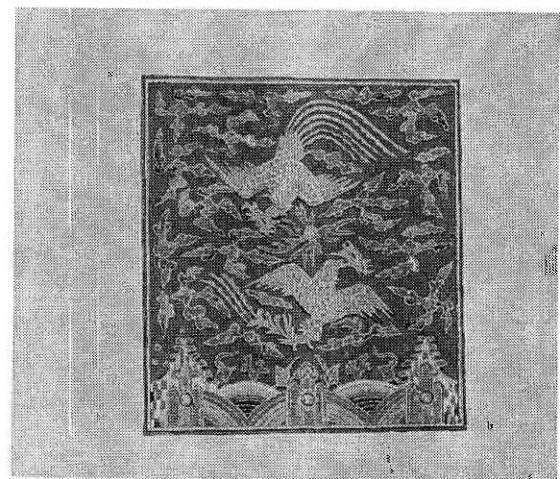
緑円彩 一般女性の婚礼服 前面



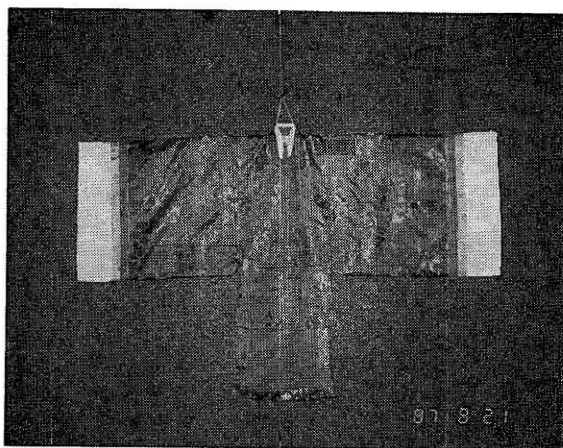
後面



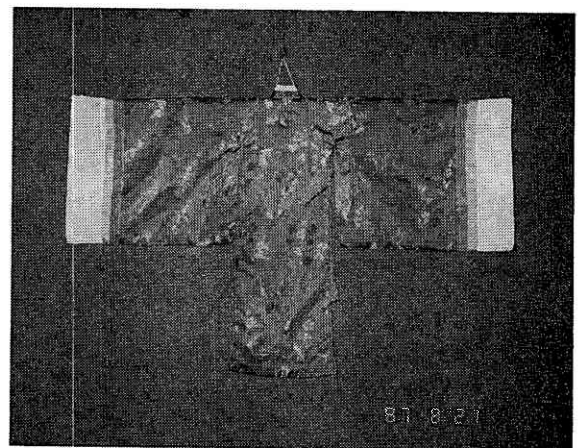
補



胸背



試作品前



試作品後

韓国服の構成技法について(6)



黄円彩 前面



後面



緑円彩 前面



後面

(資料：朝鮮王朝韓国服図録 世宗大学博物館所蔵による)